



一歩



社会福祉法人 アルカディア
令和 4年 8月 発行 第47号

障がい者福祉の現場から

障がい者福祉の現場では、いつも<人と人>が触れ合っている。しかし、残念なことにく人と人>が分かり合っているかどうか？はわからない。<人>が大切なのに、どうして<このこと>がわからないまま、時間が過ぎていくのだろう。「時間がないとか、スタッフ不足」を理由にしちゃいけない。

せめて、このニュースレターの紙面を借りて、支援者と呼ばれる<人>が日頃、どんなことを思い、考えているのか？を独白していきたい。

【ニュースレター編集部】

～障がい者福祉の現場で学んだこと～

障がい福祉分野に従事して学んだことについては数えきれないほどある。その中の一つを自分自身で振り返りながら考えてみた。

「感謝」の気持ち。

健康診断を受けるたびに「職種：サービス業」にチェックをする。サービス業は幅広い業種が含まれているが、サービス業の中でもある意味特殊な分野ではないかと思う。

障がい福祉分野は業務上、利用者の今までの生活歴、現状を支援者は知る場面がある。ご本人の生い立ち、家族との関係、障がい特性（病気）の事など、様々なことを業務上知り得ることとなる。業務上でも、利用者からはきっと思い出したくない記憶・経験、話したくないこともきっと多くある中で話してくれている。もし、自分だったら、自分の為であっても支援者に話をするか？は疑問である。日頃から話してくれ、協力してくれている利用者に対しては感謝の気持ちが強い。特に、個別支援計画や、サービス等利用計画では「目標・課題」が必須となっている。必要なことだとは思いますが、目標・課題を明確に生活していくことは生活者にとってはキツイ部分ではあると感じる。しかし、キツイ部分を一緒に考えさせてもらうことは、支援者にとっても大変な「学び」になる。目標は個人により違い、様々なケースの目標を知れることは他の分野では中々なく、他者の目標・課題については自分でも当てはまると感じることも少なくない。

サービス業でお客様に感謝することは当たり前だが、「利用者が自分の時間を割いて面談の時間を作ってくれる」ことに対していつも感謝している。

計画相談業務では、利用者との面談終了後に「お時間を作って頂きありがとうございます。」とお伝えするが、「こちらこそありがとうございます」「自分の事に時間を作ってくれてありがとうございます」といつも言ってもらえる。「ありがとうございます」と言ってもらう為にお伝えしているわけではなく、支援の質についてもまだまだ足りない部分は自分でも感じているが、嬉しい。

ありがとうございますと言ってもらう為には仕事をしているわけではないが、本心としては「ありがとうございます」と言われたいと思ひ業務をしている。「ありがとうございます」と言われるためには、日頃の姿勢が大切と日々考えている。

精神疾患・精神障がいの方の多くは、支援者の言葉により、利用者が不調になってしまう可能性も多い。自分自身も、利用者を怒らせてしまった、傷付けてしまったであろうと感ずることがある。自分としても「プロとして、利用者の生活が良くなるように」と要らぬ声掛けをして、後悔したこともある。自分が後悔したぐらいなら良いが、利用者の人生を左右してしまうことになってしまっていたら、取り返しがつかない。

面談後には利用者には申し訳ないが、「疲れた」と思うこともある。楽しく会話が出来ている面談の機会なら問題はないが、楽しい面談ばかりではない。面談中は表情、声、服装、座り方などなど、視覚、聴覚、嗅覚などもフル回転し、今までの状況も考えながら対応する。色々な感覚をフル回転させれば疲れるのは当たり前で、その分「ありがとうございます」の言葉が次も頑張る活力になっている。

ある飲食店のマスターが言っていたことで自分としての価値観の構築にもなった言葉として、採用して一番先に職員に伝えることは「自分のファンを作って」と伝えると話を聞いた。接客サービス、調理の能力（技術）などは非常に大切な部分ではあるが、まずは自分を出し、一人でも多くの方に認めてもらい、「また来たいな」と思ってくれることが店の利益にも繋がる。

地域活動支援センターなどの通所施設では、「相談があります」と利用者が通所してくれる時もあるが、「あの施設の職員に相談したいな」と思っただけのような努力は必要。本当は、相談でなく「顔を見に来たよ」「会いに来たよ」となってもらえれば、相談、心配は少なく、笑顔が増えることが良い事ではないかと考える。

笑顔で「ありがとうございます」と言ってもらえるごとに学びも深まるのではないかと考える。

地域活動支援センターふらっと・ふらっと相談支援事業所 片山和也

～障がいなどなどにまつわる雑感～

アルカディアより依頼があり、「なんでも好きなことを書いていいよ」と言われましたので、これは自分の頭の中を整理するよい機会だな、と、文字にしてみることにしました。でも絶対に書ききれないので、ギュッとまとめたらくはふわふわした話になってしまうだろうな、と少々不安ながら書き始めています。

僕は現在、障害者就労継続支援B型事業所のガーデンタイムという所で、パン屋や雑貨屋のフリをしながら日々通ってくる人たちの支援をするフリをしつつ、同時に管理職としての役割をせさせとこなすフリをしています。その日々を営む中でいつも考えるのは、障害とかというものは結局なんなんだろうということです。

ずいぶん前、少し違和感はあるながらも、障害とは、障害者個人に起因するもの、能力や体の状態のマイナス面を指すものと考えていました。その後、学校や職場で学び、実際に現場で人と関わる中で、「障害は個人ではなく、社会との関係の中で生まれる」とか「障害とは生きづらさである」とかという考え方がピンとくるようになってきました。言うなれば、大多数の人たちが効率よく生活できるための社会の仕組みがまずあって、その仕組みから溢れる少数の人たちの生きづらさが生まれている。もっと言えば、病気や極端な不得手が元で、生産性や効率を求める社会の枠組みにははまりづらい人々を「障害者」と呼び、一部に別の仕組みを敷くことで、その人たちにも、多少なりとも安心できる生活を担保するのが福祉や社会保障なんだろう、と。一少し逸れてしまいましたが、「保障」という言葉には損害を与えないように守るという意味、「補償」という言葉の方は損害の分を埋め合わせするという意味があります。そこから、じゃあ社会保障ではなくて「社会補償」と書く方が正しいのでは、などと個人的には思っています。つまり、便宜的な社会の形が原因で現に生きづらさを抱える人にとっては、既に損害を被ってるだろ、守られてないだろ、と思うからです。だからしっかり埋め合わせるべきだろ！仕組みをよくしていくための策はとりつつ、社会ホシヨウ費なんて今の時点からもっとずっと多くていいだゴ`ニヨ`ニヨ …失礼しました。

話を戻して、通所しているメンバーの人たちを見ていると、「この障害があるから」というよりも、その人を取り巻く環境や周囲の人とどんな関係を築いてきたか、とか、生活がどんな変遷を経てきたか、とかいうような、その人の“経験”が大きく生きづらさにつながっていきそうだな、と見えることが多々あります（もちろんそういった周囲との摩擦や辛い経験は、診断や不得手の影響も大いにあるのでしょうか）。逆に、身内の方のステキな関わりが溢れていた人や、本人にとって心地よい場を持っていた人が、僕が勝手に「この人こんな生きづらさを抱えていきそうだな」と思い込んだ壁などを、ヒョイヒョイともものともせず越えながら生活している姿を見せてくれることがあるのです。

その感覚をもって、様々な人との関わりの中にいると、もう少し見えてきたものがあります。特に、自分自身が社会に出て己を振り返る機会が増え、障害者と呼ばれる人だけでなく、スタッフやその他関わる人が多くなってきた中で、それは「実は誰も彼も、僕自身も、その人なりにそれなりに生きづらい思いをしてるんじゃないの？」ということです。これは、きっと多くの人が感じていることなのだろうと思いますが、おそらくは全ての人に少なからず当てはまることだろうと思っています。管理者の目線なのかもしれませんが、「この人のこの傾向は、いいんだけど、このチームの中では辛いんじゃないか？ 組み合わせ次第では諸刃の剣じゃないか？ うーん、どうしたら…」などとよく考えるのがいい例です。病気や障害の診断を受けているかいないかにかかわらず、誰もが少数派でもある、ということです。

さらに話は変わります。

「障害だけではなく、できることに着目しよう」 とか

「その人の悪い面だけでなく、良い面を見よう」 とか

「〇〇さんも、当初よりいい方向に変わってきたね」 とか、

これらは振り返ると僕もよく使ってきた言葉なのですが、一見すると、「良い面に目を向けられるなら、支援者としていい目・姿勢を持っているんじゃないの」と思えてしまったりします。

でも、この時善し悪しを判断しているということは、そこには「評価」があるはずで、その評価の瞬間、僕の心の中で指標にしている価値の基準は、結局のところ、効率的かどうか・多数の人の生活に近いかどうか・誰かに迷惑をかけないか・大勢に喜ばれるか など、一方的な、しかも大抵は多数派になれるかどうかの視点だと気づくのです（ここに「管理」の視点が重なるともうタチが悪い）。例えば、「〇〇さんのコミュニケーションが前よりも増えた」ことを喜んでいる僕は、コミュニケーションが多いことを善と思っているけれど、ならば同時にそうでない状態を悪と誤ってしまっているのではないかと。結局、コミュニケーションについて多数派であることを勝手に押し付けているのは僕自身ではないかと。誰かの生きづらさを形成するかもしれない流れの一端が「僕自身の中から」発生している瞬間です。世間でも、SNSが大きくなうねりの中で誰かを集団で傷つけてしまう話やら、同調圧力という言葉が取り沙汰されるやら、というのを目の当たりにするに、やっぱりそのような多数の側に身を置いて少数を突っつく心理が生まれやすいのは、誰の根っこにもある側面の現れなのかもしれないな、と思います。自分がそれに加担していること、を知っていた方がいいし、むしろ社会の中で起こっている出来事に微塵も加担していないなど、それがたとえ遠くの出来事であってもありえないと思うのです。決して、それを全て消していくことが必要とりたいのではなくて、多数側にいる強みを活かして生活することが必要なときも多いわけで、実際に僕自身もその恩恵を大いに享受して生きていると思います。が、いたずらに物事や人をジャッジすることをもう少し手放して、まんなを味わえるようになりたいなあ、という希望だけは、人と関わる時のちょっとした杖として携えるようにしています。

ここまで、僕が思う、思ってきた“障害”観のようなものを語ってみましたが、今一度言い直してみると、前述したようなマイノリティな側面をみんなが（それこそ勝ち組っぽい人や悪徳政治家みたいな人も恐らく）持っていて、それはその人の生きづらさや癖（あるいはもしかしたら生きやすさや味）として現れているんだろう、ということ。もう一つ、合わせてマジョリティーな側面もみんな（障害者と呼ばれる人たちやドロップアウトしたような人たちも）が持っていて、それは他者の生きづらさを生み出している可能性を孕んでいる、ということ。そういうことなのではないかなーと、最近改めて思っています。ここからはイメージでしかありませんが、人間はきっとそんな二面にとどまらず、ひとりの人の中に多様な面があってしかもそれが時間とともに目まぐるしく変わるんでしょうし、その人を見つめたり触れたり関わったりする人もきっと同様なので、人が人を捉えようとしたって、結果はめちゃくちゃにしかならないのではと思います。結局、障害だとか社会だとか人間だとか自分のことすらも、まるでわからんなー、でも「わからん＝おもしろい」だし、そこだけでも知っていたら自分にも他者にも社会なんかにも、生きやすい適度な余白を作っていけるのかもしれないなー、というのが、今の僕の考えであったりします。

未熟ながら色々として試行錯誤したり誰かの言葉を頂いたりしてきて、やっとこさ思い至ってきたことでもあり、そうやってたくさんの気づきをもたらえる、つくづくステキな所に身を置いたものだなと感じます。その試行錯誤や考えを巡らせるのが好きでこんな場所を選んだのだろうと思っていますが、今のところ、たぶん試みとしてはうまくいっているということでしょう。いろいろな“やっているフリ”をしながら！

おかげさまで、今回そんな頭の整理が少しできた気がするのですが、その甲斐もあり余計に語りたこと（例えば「社会補償」などと言っておきながら、福祉サービスに従事することで対象者より先に生活を豊かにしているジレンマ、とか）が出てきてしまっていることは否めません。もしも、意見をぶつけたり一緒に楽しんだりしてくれるような奇特な方がいたら、どこかでお喋りを交わす機会があれば嬉しいです。

社会福祉法人明清会 ガーデンタイム 齋藤 拓

今回、他法人職員に初めて原稿依頼をしました。

読んでいて、拓さんらしさが、随所に見受けられクリーンヒット！せっかくですので、この拓さんの意見に対するコメントを次回あたりに載せたいと考えています。

(ニューズレター編集委員会)

～障がい者福祉の現場で学んだこと～

社会福祉法人アルカディアに入職して5年目となりました。それまでは高齢者福祉の現場で働いており、高齢者の分野でも身体や精神の障害をもちながら年齢を重ねてきて介護保険サービスの利用に繋がってきた障がい者の方と関わる機会もありましたが、本格的に障がい者福祉の現場で働くことは初めてでした。

入職してから配属された援護寮はばたきでは、自立訓練（生活訓練）施設の生活支援員として、主に精神科病院を退院され地域生活に移行するための支援をしてきました。自立に向けた訓練として、生活技能だけでなく生活技術の獲得を目指していくなかで、コミュニケーションをとることが苦手という利用者さんが多くみられます。どのような接し方がその人に合っているのか、入所時のアセスメントや体験中の様子を見させていただき、「話すペースをゆっくりしたほうがいいのか」「分かりやすく要点をまとめた説明がいいのか」「逆に一つ一つを詳細に説明したほうがいいのか」「距離感が近くなりすぎてしまうのか」など一概にコミュニケーションが苦手とご本人から聞いていても、どのような点から苦手意識を持つようになったのか人それぞれであることを学ばせてもらいました。

支援をさせてもらう中で、その人に合わせた口調や説明の仕方を変えることで理解や信頼を築けてきた気がします。また一人一人の対応を変えることで、よりその人の考えや要望に寄り添って、課題へ一緒に取り組んでいることが自分自身の支援へのモチベーション向上につながっていると思います。

また利用者さんの中には、入退院を繰り返していたり長期入院されていた方も多く、地域生活を送ることの難しさを漠然と感じていても、何が課題になっているのかが分からないことがあります。病院での生活はある程度決められた環境となっており、自己決定をする機会が少なく自分の考えを伝えることが難しいのかと思います。そのために自分の中の葛藤を解消できない状況が多くみられ、その際にどのような支援をすればよかったのかと悩むこともありました。そういった体験を通して最近の支援で意識するようになった点として、相談をどのようにしてもらうか、相談をしやすい環境作りを考えるようにしています。

自分自身が障がい者福祉といった今までと違った職場環境で働き始めた時、右も左も分からず何をすればよいのかも分からなかったこと思い出しました。支援への悩みだけでなく、市町村によって行政手続きが違っていたりして戸惑うこともありましたが、色々な方々に相談をすることで解決をすることができました。相談をすることへ多少の抵抗もありましたが、実際に相談をすることで関係者からの協力を得やすくなり支援をよりしやすくなるといった経験をしてきました。新しい環境に馴染んでいくためには、相談をすることの大切さを学ばせてもらいました。利用者さんにも新しい環境に慣れていただく中で、相談をすることで周囲の人から協力をしてもらえる体験を積んでもらえるよう支援をしていけたらと思っています。

これまで障がい者福祉の現場で学んできたことを活かしながら、利用者さん一人一人に合わせた対応を取り、ご本人や関係者と相談をしあって連携を図ることで、よりよい支援体制を整え、これからも利用者さんと一緒に地域生活に対する課題へ取り組んでいけたらと考えています。



精神障害者援護寮はばたき 島田 敦史

～今後の学び～

アルカディアの「対等性を目指す」という理念の下、利用者と支援者の関係が重要であることを学んだ。現場において相談援助が効果的に実践されるには、支援者と利用者の専門的な援助関係づくりが極めて重要である。もっとも対人援助場面では、支援者は自分自身を媒体として利用者を受容するとともに代弁も行う。そのため、自身では援助における自分の反応や、自分の行為がどのように利用者に影響を与えるのかを積極的に、かつ客観的に見つめ気づく必要があると考える。つまり、援助を受ける人に対して偏見などの先入観や思い込みなどを持って援助をしないように自分自身の考え方などをしっかり持った上で、自身得意と考えている相手を傾聴することを活かし、最終的にはエンパワメントになるような援助にしなければならない。

今後エンパワメント実現に向けて取り組むべき事例としてケアマネジメントのモデルの1つとしてストレングスモデルがある。これは、利用者が本来もっている能力や環境の側の潜在的能力にも着目し、それを引き出し、活用したり、セルフケア能力を高めたりすることに重点をおく。ストレングスモデルは、セルフケア能力、家族の力、地域の力、専門家の能力の向上に焦点を当てている。ストレングスモデルから導き出されたストレングス視点の鍵となる概念は、エンパワメント、成員性、レジリエンス、癒しと全体性、対話と協働性、不信の中止であり、中でもストレングス視点の中核的概念として、レジリエンスが着目されている。

レジリエンスとは、回復する力、心の発達を守るしなやかさなどと表現され、「悪い状態に対してうまく適応する能力のことであり、不幸な出来事やストレス、喪失などのさまざまな人生の苦難を切り抜けて生き続け、跳ね返し、乗り切る能力やしなやかさである」と定義され、人々のもつ回復力に焦点を当てた概念として発展している。利用者のストレングスを生かし、レジリエンスを育てることで、人間がもっている逆境を乗り切る力を強化することができる。また、常に利用者との対話することを試みることで、利用者自身が責任をもって目標を立て、行動し、目標を協働で達成することにつながるのである。

ストレングス視点では、今あるシステムや資源が利用者に役立つものか、障壁になるものかを常に利用者と支援者が批判的に検討し、役立つものに変革していく。そして、サービスの獲得においては、一般的な資源を活用することで、さらに利用者と地域の結びつきを強化し、利用者を地域に所属できるようにしている。

またこの視点では、人の能力や才能、変化や成長の上限は定められないと考え、成長を促す援助を行う。様々な物事にすべて利用者の希望に基づき挑戦していくことが大切である。これは、リスクも伴っており、「ハイリスク・ハイサポート」という立場で支援しているからこそ目標を達成できるという考えである。支援者が利用者や地域の可能性を信じることは大変重要である。それから、大きな目標を、達成しやすい小さな目標にして、達成したことを賞賛していくことで、利用者は回復していく。ストレングスモデルは、そうした小目標の達成で利用者のエンパワメントを高めている。

ストレングスモデルの目的は、最終的には利用者が精神保健システムから解放され、地域の人々と「支え・支えられる関係」を構築し、地域に所属することである。いつまでも施設が利用者を抱え込まず、利用者の自立性を尊重することが重要であることを改めて学んだ。

アルカディアグループホーム事業所 松沼敦也

コロナ禍が始まって早2年半が経った。検温、マスク、ソーシャルディスタンス、換気、うがい、消毒...もういい加減にしてくれ！と言いたくなる今日この頃。今は第7波の真っただ中。県内でも医療機関や高齢者施設、障害者事業所でクラスターが発生している。法人も気を抜けない毎日が続いている。

それにしても...。こんなこと、生まれて初めての体験だ。ある意味、長生きしていると「いろんなこと」に出くわし、貴重な体験をさせてもらっているとさえいえる。

それにしても...。大人も子供も大声で笑ったり、ふざけたりすることができない日々がこうも長くなると、笑うことさえ忘れてしまうのでは？と心配になったりする。大学生などこのままでいくと、ろくに授業も受けられないまま、卒業していくことになりかねない。昔なら「授業料、返せ！」と騒いでいただろう。

それにしても...。既に第7波だ。一年に3回ほどの周期で感染拡大の波が押し寄せていることになる。いつまで続くのか？簡単に飲み薬などで治るようになるまで、あとどれくらいかかるのさ？

それにしても...。日本人は律儀で従順な国民だ。国外状況を報道でみていると街中でマスクをしている人は半数以下。

それにしても...。最近、「自粛」っていわなくなった。社会活動との両立を考えてのことだろうが、一度、足が遠のいた外食産業などに以前と同じように行く人は少なくなるし、外国からの観光客も元にはもどらないだろう。

そうならば...。もっと質素でつましやかな生活スタイルを考え直した方がいいかも？そういう時代がきたことを、地球という惑星に住む人類に宇宙が「星を見て生きろ」と示しているのかも...。

編集部：中田駿

編集後記

障がい福祉の現場に身を置き、生活の糧としている者の様々な意見。内容は異なり、切り口も様々。障がい者支援とは何だろうか。障がい者を障がい者として見るべきなのか。見ない方がよいものなのか。社会参加とは言うけれど、障がい者を一人の障がい者として参加出来るように考えるのが適性なのか。それとも障がいという側面をもった一人の人間としての参加と考えるのが適性なのか。はたまた、根本的に、こう考えることそのものが、参加を遮る潜在意識の表出なのか。わからない。五里霧中。いや百里夢中かもしれない。だが、ここで支援者が折れてはいけない。《答えなき道》を突き進むしかない。その先に、支援者個々人の答えがあるかもしれない。その答えが、《障がい者の道》と交わることを信じて。

ニューズレター編集委員

